

連歌秘傳抄の付合説

金子 金治郎

緒言

連歌秘傳抄は單に秘傳抄とも書かれて、宗祇の著作であるが、成立の年月は不明である。連歌の史的研究後篇には帝國圖書館本を擧げてゐられる。又畏友伊地知哲夫氏は宗祇著作權攷(國文學研究 第三種所載)に於て、宗祇の連歌學書として紹介してゐられる。帝國圖書館本には作者名が無いので、連歌の史的研究には宗祇宗長頃の作かとしてゐられたが、伊地知氏本には宗祇在判とあるので、作者の問題は決定したのである。後に述べる太田武夫氏本・高野辰之博士本、何れも宗祇作とあり、無窮會所藏の寫本「連歌書目」(朱にて「深都酒屋」の印にあり。小山田與清藏)に「秘傳抄 宗祇作」とあるも恐らく本書かと思はれる。作者に就いては、宗祇述作を疑ふ材料は見當らないのである。

専ら付合を説いてゐるが、付合の用意心法の論議ではなくて、付様の八躰とて、（太田氏本、伊地知氏本には、外に脇句の付様を内容とし、容としたもう一つの、秘傳抄が加はる。）八躰の名目や所謂てにはを擧げて短い註語を加へ、それに例句を擧げてゐるので、中には例句のみで註語の無い項目もある。例句の作者は救濟・良阿・頓阿・宗砌・行助・忍誓・專順・心敬で、帝國圖書館本で數へてみると、宗砌の三二句を筆頭に心敬の一句に到つてゐる。救濟二〇句、良阿一九句、頓阿一五句等は、此の人々の作

品に貴重な資料を附加へるものである。併し本書の價値は飽くまで付合の説、特にてには付の説として秀れてゐる點にある。良基以來の付合の説を検して本書に到れば、確かに一時期を劃する著作たるに氣付かざるを得ないのであつて、茲に本書を考察する所以も、偏に付合の説、特にてには付の説としての本書の價値に觸れよう爲である。

一 諸本の概要

内容の考察に先立つて、諸本の書誌的な概説を試みたい。

諸本

寓目の傳本は緒言に擧げた、帝國圖書館本・太田武夫氏本・伊地知哲夫氏本・高野辰之博士本の四本のみである。

(1) 帝國圖書館本(略號 帝本)

外題内題共に「連譚秘傳抄」(秘の字は原本に従ふ。以下)の諸本の書名も原本に従ふ)とある。書寫年代は不明であるが、徳川期に下らない古寫本である。美濃判・袋綴。墨付二十一葉、一面十一行書き。内容は、序文(第一丁オカ)・付様八躰(第二丁オ初行オ)・手仁葉付(四丁オ八行オ)の三部から成り、付様八躰と手仁葉付の夫々の部分の初めは、その部分の序の形をなしてゐるのでそれを全體の序に對して小序と呼んで置く。猶手仁葉付の部分は全部で三八項である。最後に(二十一)

右此集者中古當世三代連哥也

とある。他には何の奥書もなく、宗祇の著作か否か、本書のみでは不明である。

本書には傳寫の際の誤りと思はれる所がある。右の奥書に「中古當世三代」とあのも不備で、太田氏本の如く「昔

中古當世」の如くあつたものと思はれる。手仁葉付第二十二項「まだ」の例句「たえく」に山路の末はあらはれて」の心敬の句は前句を缺き、其の部分が一行空白なのは明瞭に本書の脱落である。(太田氏本伊地知氏本では「また木の」本はみえぬ明あけ」の前句がある) 本書の親本となり或は祖本となるものの存在は當然考へられる譯である。

(ロ)太田武夫氏本(略號
太本)

外題なく、内題には「秘傳抄」とある。裏表紙の見返しに、「日文祿四年三月五日 主久安(花押)」と、本文とは異つた書體で書かれてゐる。其の時の書寫か、或はそれ以前であらう。袋綴・横本。紙數二十六丁、全部墨付き。一面十二行書き。内容は帝本と大體同様な序文・八躰・手には付(項數四)があつて(第一丁オから
二十三丁ウ迄)、次に

此抄者昔中比當世を各と取集」見合て注置物也能と相傳可被成也」

右得秘傳抄たとへ千金をあた」ふ共二人とつたへへからす此旨そむきいは、」住吉玉津嶋別而は天神の御討を」かふむるへき者也能と可秘とよ

宗 祇 在 判

正 佐 在 判

(印は行末。
以下同じ)

の奥書が、前文に引續いて誌されてゐる(二十六丁)次に二行置いて「秘傳抄」とあり、以下腋句三の習として、さうわき・たひし腋・違腋を擧げ(二十六丁
オ三行迄)次に

是はわき一流の相傳也

とあつて、次に腋の留りの一項があつて(二十六丁
オ終行迄)終つてゐる。即ち太本は帝本と大様同じ内容の秘傳抄があり、それ

には宗祇正佐の兩判があつて作者を明瞭にし、それに更に脇句を内容とする別の秘傳抄が附加されてゐる。然して「後の秘傳抄」(と假稱する)には作者を明記してゐないが、名稱からも亦「前の秘傳抄」(と假稱する)に附加されてゐる點からも同じく宗祇作と想像するのである。これは併し次の伊地知氏本で明瞭にされる。

(ハ) 伊地知哲夫氏本(略號伊本)

外題は「連歌秘傳抄」、内題は「秘傳抄」。書寫は比較的新しく、美濃判の假綴。宗長の「用捨之詞」と合冊。本書は第一丁から三十八丁に至る。一面八行書き。内容は全體太本と同じで、「前の秘傳抄」(一丁オから三十三丁オ三行迄)の奥書は此抄物者中比當世各取集見合注置物也能と可有相傳者也

宗祇 在判

正佐 在判

とある。即ち太本奥書の前半に相當し、後半を缺いてゐる。次に「連歌秘傳抄」として、「後の秘傳抄」の部分がある。但し、太本では三の習と腋の留りとの間にあつた識語が、本書では最後に來て

右者脇一流の相傳也

とある。次に「奥書」と記して、次の如くある。

右此秘傳集者上代之先達奥藏也」然間中昔秘失雖爲詞閣宗砌法師」種と先達之教訓見書記後代之」詞林連哥之道之(マ、)明意作此抄」縱家風之名跡之雖爲仁家初心」之時者不可傳受不知當知之知與」不知也哥道其位不至時者金言之秘」密不知寶努と此旨(寶努)有者住吉玉津嶋」別而天滿天神可蒙御罰者仍如件

宗 祇 在 判
正 佐 在 判

即ち伊本は内容は太本に似てゐて、「前の秘傳抄」の宗祇正佐兩判も同じであるが、「後の秘傳抄」の次に宗祇正佐兩判の奥書を持つてゐる點等で、伊本に異つてゐる。

(二) 高野辰之博士本(略註)
(高本)

外題には「宗祇秘傳抄」とあり、内題には「秘傳抄」とある。宵柏口傳之拔書と合冊。書寫の年次は奥に、寛文五乙歳九月下旬「澄延」とあるのがそれであらう。袋綴横本。本書は後半の二十三丁オから三十丁ウに至る八丁。卷首「秘傳抄」の下に「宗祇」とあり、序文は無く、八弊の小序に始まり、てには付の第七項「けれと留て付」で終り、「宗祇在判」とある。一應完本の體裁をなしてゐるが、「けれ」の項には例句も擧げて無いから恐らく後半を失つたものと思ふ。後に觸れるやうに、帝本よりも太本伊本に近いかと思ふだけである。

諸本の關係と成立の問題

(一) 太本と伊本との關係

兩本共宗祇正佐兩判本で、同一系統であることは明かである。共に「後の秘傳抄」を併せ有つてゐるが、その點は更に吟味するとして、前の秘傳抄」に於て、宗祇正佐兩判本の特色となる點に就いて兩本の異同を検してみると、

1. てには付の部の項數は共に四十三項で一致する。

2. 例句は、八弊の部は各一句宛で一致。てには付の部は太本一五三句。伊本には一箇所脱落があつて一句分を減じて

る外は太本に同じ。(伊本の脱落は「て留」の項。前の例句の付句「山櫻志賀の遠へにちるをみて」「事」と、次の例句の前句「みたるなこゝろ世をやるか」と、次の例句の前句「れき」とか脱して、前の例句の前句「返にやすらふ浦の舟人」に、後の例句の付句「墨染の袖にむかしの月を見て」が挿れてゐる。)

3. てには付小序中に「待公量阿頼阿」とある量阿は兩者一致。例句の作者名「量」も一致。

4. 例句の作者名は、八躰の部には兩者共無く、てには付の部では、太本は十三項「も」の部までは大體擧げてゐるが、伊本は四項「らん」まで、ある。

5. 語句の異同は相當あるが、後に帝本との異同で擧げる八躰小序の相異の如き根本的な異同はない。

概略右の特色を持ち、その點で兩者略一致してゐる。

次の「後の秘傳抄」の部分では、内容には大差はない(「對之臨之事」の項目名が太本に缺けて)。併し此の部分周つて、兩本の成立過程に關する問題が提起されるかと思ふ。即ち太本の「前の秘傳抄」の奥書の中「右得秘傳抄たとへ……住吉玉津嶋別而は天神の御罰をかふむるべき者也能と可秘とと」の部分が、伊本に無く、伊本の「後の秘傳抄」の次の奥書中に「住吉玉津嶋云々」と見えてゐる事實である。これを次のやうに考へる。太本の奥書に三神を出してゐる所を見ても、宗祇正佐兩判本秘傳抄はそこで完結してゐる。即ち宗祇正佐兩判本の本來のものは一應「前の秘傳抄」だけであつたのである。それに「後の秘傳抄」が書添へられたのが、現在見る太本である。ところが伊本の最後の奥書を見ると、これは「前の秘傳抄」「後の秘傳抄」を併せて「秘傳集」と一括して呼んでゐると思はれる。それは奥書の中宗砌云々ある部分は、「前の秘傳抄」にては付小序中に「上代は待公量阿頼阿などの類五六人はかり此てにをは付を心得……後このてには付の抄物相傳すべき人なく世に秘しまなひて昔語のやうになりて……近代宗砌齋古抄をひき見て」(伊本ト)とある部分に照應し、恐らく右小序に依つて奥書の文を成したと見られるからである。斯様に「前の秘傳

抄」と「後の秘傳抄」とを一括する意志の働いてゐる點から見て、伊本は現在の太本の成立以後に成立したものと考へられる。太本「前の秘傳抄」の奥書の後半の無いのは、右の様に「後の秘傳抄」を一括する際に削つたものと考へる（（未して此のことは恐らく正佐によつて行はれたかと推測してゐる。））

以上伊本太本を比較した結果を要約すれば、宗祇正佐兩判本の第一次の形態は「前の秘傳抄」である。其の後「後の秘傳抄」を添加したのが太本の形態である。次に「後の秘傳抄」も亦宗祇から正佐へ傳授された事を明瞭にし、

「前」「後」は一括すべきであるとしたのが伊本の形態であると思ふ（「脇一流」云々の語後の位置から、三の習が先づ加へられ、次に脇の留りの項が加へられたと見られるかも知れない。）

（ロ）帝本と太本伊本の關係

帝本は宗祇正佐兩判本の「前の秘傳抄」の部分に相當してゐる。今兩者の異同を比較してゐる。

1. 八躰付の部分は、例句は一句で兩者同じであるが、帝本には作者名がある。又その小序に顯著な相違がある。兩者大略一致の部分を行とし、相違の所を二行とし、帝本を左行、太本（伊本を）を右行にして、小序の全文を示す。

連哥に色々の躰あり。哥に六儀（有によりて、連歌にも）六の躰を明（に）せり。雖然付様にあまたの品（ナシ）あり。
（伊）八躰十六（伊）躰廿五躰四十八躰（ナシ）已上八十躰を明（に）せり。如此の躰雖多當世（先）八躰を（連哥の）肝要とせり。

即ち主な相違は、帝本が「あまたの品」とした所に八十躰云々の詳細な説明が加へられてゐる。（高野博士本も、爰は太本系統かと思はれる。）

2. てには付の項數は太本伊本の四十三項に對し、帝本は三十八項である。五項尠いが、其の中一項は、帝本二十二項に「たにと云とさへ」と云に付様」として、たに・さへ双方の例句を擧げてゐるた對し、太本伊本は「たに」の

次に「さへ」の一項を立てる爲に生じた差である。もう一項は、帝本二十六項の「いづく」の例句三句の中最後の一句は「いつれ」の例である。それを太本伊本は「いづれと云てには付」として一項に立て、る爲で此の點は帝本の不備である。他に太本伊本には、「つれ」「ごと」「ほど」の三項があつて、これは帝本には全然無い。

3. 次に例句の數は、八躰の部分は各項一句宛で兩者同じ。てには付の部分では、帝本の二二六句に對し、太本は一五三句である。猶例句は相互に有無が存し、帝本に存して太本にない句二七句、太本に存し帝本に無い句五二句で、此の點には顯著な相異がある。

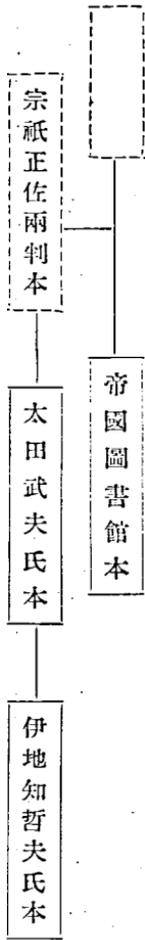
4. てには付小序中及び例句の作者名中の量阿、又量は帝本は全部良阿、又良に作る。量阿の名は宗砌の砌塵抄に見え、又享徳二年二月四日宗砌等何人百韻(廣島文理大本「さ」
くらかひ」所收)にも見え、宗砌頃の作者と思はれるが、右小序中には「上代は侍公へ良量阿頓阿など」とあるから、爰は善阿の門弟良阿が正しく、例句中の良も良阿であらう。即ち此の點では太本伊本は共に誤りがある。

5. 例句の作者名は、八躰の部てには付の部を通じて大部分擧げてゐる(余例句一三四句中作者
名のない句は三十二句)に對し、太本伊本は極めて少い。

6. 語句の異同は相當あるが、八躰小序のやうな根本的な相違は見られない。

以上に依つて宗祇正佐兩判本の「前の秘傳抄」と帝本とが、全然別系統であることは明瞭である。そこで、帝本(註し
と云ふべきである)と宗祇正佐兩判本(太本伊本系
統の祖本)との成立の前後を見るに、その何れが先に成立したかは遽かには斷定出來

ない。併し、八舛小序の相違では、帝本が單に「付様にあまたの品」ありとした箇から、宗祇正佐兩判本が「八舛十六舛廿四舛四十八舛八十體」(伊本上)ありとした詳細に進んだと見るが穩當であらうと思ふ。又項目數と例句に於て、兩判本が帝本より多い點は、多いものが少くなつたとも考へられぬことはないが、帝本に於て「たにと云とさへ」と云に付様としてゐたものを、兩判本に於て「たに」と「さへ」とを分つて、より整備した形にした所などから見て、帝本系統が前で、兩判本は帝本系統のものを増補して成つたと考へたい。唯太本伊本には良阿を量阿とするやうな顯著な誤があるので、それが兩判本の原形を其の儘に傳へたものとは考へられない。以上三本の關係を圖示してみると次の様になる。



以下の内容の考察は、始源の形態に近い帝本が中心となり、宗祇正佐兩判本の「前の秘傳抄」が参照される。一後の「秘傳抄」も宗祇から正佐への相傳であるが、脇の付合を論じたもので一般的でない所から暫く考察の外にした。(伊本) 付合も一變の付合も根本は同一であるべきであることは勿論であるが

二 付様 八 舛

巻頭の序文は、連歌を以て歌の雜舛となし、歌の卅一字に哥の一舛を加へて佛の卅二相に象り、歌の五句は五行五常であるとし、歌を二分して連歌としたのは、生佛一舛の所から佛性衆生(生太伊)に分れたる儀とし、次に「連哥(伊太伊)に付て功能數

(大本 伊)
 不知事多と云へとも此抄に委不及注(但)連哥を翫人(は)不行而(ナシ)伊(ナシ)太伊)「佛神の内證にかなひ行せずして」佛道に至みたる
こまやかにしるす物也(太伊)
といふも此則太伊(大本)
 也委は連哥の十徳に見えたり(太伊)未世の人はいかにもこの道を本に可嗜也(とすへし)伊)とあつて終る。専ら連歌の功德

を述べてゐるが、右の引用中、帝本は此抄に委不及注とし、太本伊本は反對にこまかに記すとしてゐる。本書の内容から言へば帝本が正しい。猶文中連哥十徳とあるが、既に心敬の馬上集にも連歌廿五徳の名が見え、又兼載自筆の連哥十徳もある由(通歌の史的研究前(篇二〇五頁参照))であるから、宗祇の序文中に見えても異とするには當らないであらう。要するに本序文からは付合論の一片も見出せないのである。

次に八躰の部であるが、その小序は前に引用した通りである。所謂八躰とは、平付・四手付・風情付・詞付・違付・心付・相對付・埋付で、以上を纏めて「八躰」の名稱を冠したのは本書が嚆矢であらう。次のてには付小序には、中古には此八躰はかりを得意」とあつて、八躰が行はれてゐた様に記してゐるから、或は既に「八躰」の名稱も行はれてゐたかも知れぬが、寓目の文献では本書が最初である。然して右の名稱が、良基の連理秘抄にその先蹤を求め得ることは何人も容易に氣付く所であらう。即ち同書には

平付の句 四手 景氣 心付 詞付 埋付 餘情 相對(僻連秘抄) 引違(は對揚)

等主として付合方法の分類を挙げ、更に續いて、隱題・本哥・本説・名所・異物・狂句等主として素材に關するものを擧げてゐる。八躰の中風情付・違付以外の名稱は右に全く同じく、風情付は内容的に右の景氣に近く、違付は名稱としては右の引違に關係がある。併し仔細に見れば、連理秘抄に同じもの、名稱だけ同じで意味の異なるもの等がある。以下連理秘抄以後の學書に散見する所をも參照しつゝ、八躰の解説をしたいのであるが、右八躰を今二類に分つて

置く。(各條の下に括弧を付けて掲げたのは本註の本文、四點は定考。)

一類 (素材的)

1. 風情付―「花の面白きに月の風情を付。紅葉の句には草花などの面白を付也」

(考) 連理の「景氣」に同じか。其の註に「眺望などのおもしろき體をつくへし」とある。筑波問答には「風情句」「眺望句」と並列す。連歌十體に「風情付」の句あり。

2. 詞付―「ことの葉のたよりを以てなかきと云になはと付よると云に矢と付を云也」

(考) 連理の「詞付」に同じ。其の註に「こと葉のたよりにて付と」あり。

3. 心付―「よりあひもなくこと葉のたよりも又風情よせひもなく心のたよりにて付也」

(考) 連理の「心付」に同じ。其の註に「心はかりにて付」

二類 (方法的)

1. 平付―「山に峯浦に舟賤と云にいやしきなりをそのまはたらかさす付るを平付と云」

(考) 連理の「平付」に同じか。其の註に「やうもなく見るところをありのまに付」。密傳抄に「平に付る事」の例句あり。

2. 四手付―「前の句あまたあるにその詞ことにあまたを取あわせて付るを云也」

(考) 連理の「四手」に同じ。長短抄の「四手ノ付合」も同じ。初心求詠集添加部分に「四手付」の例句あり。

3. 違付―「春と云に秋と付山と云に里と付昔と云に今と付ちかひ付と云也」

(考) 連理の「相對」(辭連は安を對揚に作る。)に同じ。其の註に「春に秋朝に夕山に野などの類」とあり。又連理に「秋といふ句に春野といふに山朝といふに夕か様にひきちかへてつくる」とあるは同じ。但し連理の「引

違」(醫家抄)は名稱相似て意味を異にす。即ち「月の夜に雨をこひ花の句に風をしのふ」類とす。連理は「引違」に就いて矛盾がある。(辭連は引違の項はあるが、前に引用した連理の「ひきちかへ」連歌十躰の「行違付」^{ひきイ}と密傳抄の「ち

かへ連歌」とは例句同一で、意味は本書に同じ。即ち本書の「違付」は直接には密傳抄に依るか。

4. 相對付―「田と云に畑と付松と云に竹と對して付を云也」

(考) 名稱は連理にあつたが、意味を異にする。或は連理から轉化したものか。

5. 埋付―「付る様にも聞ねともふかき心をふくみて付るを云也」

(考) 連理の「埋付」に同じ。連歌十躰に「埋句付」^{イナシ}の例句あり。

以上の如くに、相對付のや、轉化してゐるのを除けば全部先蹤を有し、且つ夫々の前例に比較して特に發展した跡がない。唯後節に見るやうに、右八躰の中、際立つて對蹠的關係にある平付と違付の二つが、てには付の考察に適用されてゐる點は本書の最も重要な意味の一つをなしてゐる。

一類二類に分けたのは、本書の右に舉げた説明に、一部連理秘抄の説明を参照して分類したものである。即ち一類は「を付」「を以て……と付」「にて」付とある如く、付る作用の手段、又は作用を蒙る目標そのもの。換言すれば付合の素材が問題にされてゐるのである。又二類は「そのまゝはたらかさず付」「取あわせて付」「ひきちかへてつく」

(連理秘抄) 對して付」「ふくみて付」とある如く、付る作用を修飾してゐる場合で、つまり付合の方法が問題にされてゐる

のである。勿論本書が右の二類を意識的に分類してゐたのではないが、その説明の吟味からは、當然右の結果が生るべきであると思ふのである。

三 手仁葉付

此の部分の小序に就いては、前に屢々觸れたが、今其の全文を擧げる。帝本に依る。(假りに句讀)

されは中古には此八鉢はかりを得意て手仁葉付と云事をしらざるによつて、たしかに不付。上代は侍公良阿頼阿なとのたくひ只五六人はかり手仁葉付を得意、其外は人是をしらす。此人と世を去て後、此手仁ハ付の抄を相傳する人なくて中古には絶けり。雖然近比宗砌法師此抄ひらき見て、むかしのことく連哥の道をなせり。又宗砌世去の後彌當世に至て此道の詞をみかけり。然れば手仁葉に色よの仕様あり。先留所を能よ得意て、きりくむへし。留所をあしくきりくめは、詞はなれ／＼になりて不付也。て留・に留・らむ・し・けり・けれ・なれや・物を、是等專也。右の文は、八鉢の最終埋付の説明文に續いて、改行も見出しもないが、太本伊本は「されは」を除き、改行して一項を立て體裁を整へてゐる。又「然れば手仁葉」の所も、太本伊本は「然れば」を除いて改行し、次を一項としてゐる。これは併し、別項を立てる必要はなく、一續きに見て差支へない所であるから、右全文を小序と呼んで置く。尙帝本の體裁からは、これを小序として、立取てるべきでないかも知れないが、八鉢付から轉じててには付を論ずる引の文として小序と稱したまでである。右小序中に、宗砌古來相傳の「手仁ハ付の抄」とあるのが何を指すか明かではないが、宗砌に到つててには付の論が進展してゐることは事實である。又その抄其の物を宗祇が見てゐたとは斷言しかね

るが、それに就いての知識は勿論有つてゐた譯である。この部分の成立がさういふ過去の傳承を負つてゐる事を暗示する言葉である。次に「先留所を能く得意」以下の所は、後に見る様に、この部分の前半「と留りて付る」群を指してゐて、全體には懸らない。従つて此の小序全體も「と留りて付る」群だけに懸るものかとの疑問も起るが、これは「先」とある點に注目すべきで、てには付一般を述べるが順序として「先」の意であるから、此の小序が以下のてには付全體のものであることは言ふ迄もない。

以下内容に就いて見るに、帝本三八項、太本伊本四三項を通じて、大部分は所謂てにはの詞を個々に標示して説明を加へてゐるが、中に二三の例外がある。即ち帝本十項「下知のてには」は、「なおもひそ」「みたるな」「をけ」「よきよ」等々を含み二十一項「ねかひてには」ニ付様は、「もかな」「はや」を含み、同三十七項「眞名の字」にて付るは例句三句で、各付句何れも眞名の字留りで、これも概括的言表である。尤も前者は、内容から言へば所謂てには付て異種ではない。後者は眞名の字で、例句で言へば「朝霞」「わたし舟」「浪」等で、先づ異種の例外と言ふべきである。猶例外としては、二十八項二十九項の「かけてには」「うけてには」や、三十八項の「とりなし手仁葉」等があつて、付合方法の形式的な名稱である。「眞名の字」「かけてには」「うけてには」「とりなし手仁葉」の四者を除けば、他は凡て所謂てにはの詞が標示されてゐる。そして夫等は「と留りて付る」とある一群と、「に付る」とある一群とに二大別する事が出来る。尤も後の一群に屬する各項中には、「に付る」と明記しない場合も間々存してゐるが、内容から見て此の一群中のものである。

(イ)「と留りて付る」一群

此の一群は大體第一項「て」から第九項「ものを」までで、て・に・らん・し・けり・けれ・なれや・ものをの八項が之に屬してゐる。第四項は「うたかひのらん」に付る様」で、明かに「に付る」一群に入るべきであるが、第三項「らんと留りて付る」に附隨して便宜茲で説明されたものと思ふ。さて上述の八項は、前記小序中に「先留所を能々得意」とした所に相當し、小序中に擧げた八つの留所と右の八項とは全然一致してゐる。この一群は、譬へばての項の最初の例句に

(下) このまゝこゝに身をも捨はや

(上) 山陰を秋のさそふに尋來て

侍公

とある如く、全て前句は短句即ち歌の下句で、付句は長句即ち歌の上句の場合である。そして、この付句を前句に付ける場合に、付句の留所に右の様な一群の所謂てにはが來れば、前句との付合關係の様態がどうなつて來るか、此の點を豫め心得て句作すべしと言ふのである。そして各てにはが付合關係をどう規制するかに就いて、大體二類を擧げてゐる。即ち(a) いひかけ (b) いひはなち がそれで、(a) にはてにとが屬し、(b) にはし・けり・けれが屬してゐる。なれやは不定で、いひかけて付るにも付さるにも作者の了簡によつてくみ合する手仁葉」であるとしてゐる。らん・ものをには(a)(b)の範疇による説明はない。

(a) いひかけ類

ては複語尾つゝの連用形で、付句から前句に言懸ける如き付合關係に於て、てがその連接の用をなしてゐるものであ

る。(例句は前引參照。猶この項中には、にて、みてを擧げこれ等) (は前句の「所詮」を留所にて吟合て付るものとしてゐる。)

には平付・違付の別がある。平付のには「世に」「木かくれに」の如き格助詞で前句の成立つ場所を示して、言懸つてゐる。

(前)うき半天を日々にかはれる (付)昨日までちきりし人も問ぬ世に 助

違付のには「見えつるに」「春なるに」の如き接續助詞で、前句の前提となつて言懸つてゐるもの。

(前)ころのいかて秋にゆくらむ (付)花ちりて後も残れる春なるに 良

(b)いひはなち類

しは全て形容詞「なし」の例である。

(前)誰か家も春や來ぬらん (付)老らくの身にあらたまる年はなし 砌

けり

(前)半天になる秋の夜の月 (付)人も來す我身も行す更にけり 頓

ければこそと係つた結びで、なれも此の中に含まれてゐる。

(前)山人やかぞへぬ年のつもらん(付)ふかき谷こそ春を余所なれ 順

以上し・けり・ければ全て終止して句の完結した場合で、直接前句に言懸からないのである。

らんは「疑の心也」として、らん「と留りて付る」場合と、らん「に付る」場合とを並べてゐることは前述したが

(a)(b)の範疇を以ての説明は加へられてゐない。ものをの接續助詞に就いても同様であるが、唯これには平付・

違付の両面の説明がある。平付は同心付(大本による。管本)であり「そのまゝ付たるおなし物を」であると言ふ。

(前)つみをもしらていさむもの、ふ(付)後の世につるきの山のある物を、良
物をが豫想する所(然るにの形で)に同心する所に前句の場所がある。次に違付は又問答付である。

(前)君さるなから國をおさむる (付)神は今出雲の旅に立物を、忍

「旅に立」と「るなから」とは物をが接続するが、神と君とは對立してゐる。問答付と云ふ所以である。

(口)「に付る」一群

此の一群は、帝本で二十五項、太本伊本は三十項であるが、中半數は標目と例句のみである。それも殆ど全部後半部に屬してゐる。これ等説明のないものは、次に標目だけ記す。(説明のないのは帝本太本伊本を通じてのこと、何れかに説明のあるものはそれに依つてゐる。)

まださへばかり なにいづれいかで 中く夜もすから つれごとく まじる ごとに ほど心か
らなをざり

(×印あるは帝本に無いもの)

説明あるものは、大體前半部に屬し

下知のてにはこそそはもころ猶又ばかとねかひてにはだにいづくなれも

の十五項である。以上この一群は、全て右に擧げた所謂てにはが前句中に含まれてゐる場合で、前句は大部分短句であるが、必ずしも短句と限つてはゐない。てにはの在り場所は、前句の句頭・句中・句末に亘つて、これも限定されてゐない。何れにしても前句付句を付合はせる場合、前句中の右のやうなてにはは見逃し難く、それ等のはが付合の様態を規制する一つの要素となつてゐるのである。今説明のある十五項に就いて見るに、大體二類を擧げてゐる。

此の二類とは、前の「と留りて付る」一群中の、に及びものをに於て見て來た兩様の作用たる平付と違付とである。にやものをと同じく、「に付る」一群中でも、こそ・そ・は・も・いづく等は、一つで兩様に用ゐられてゐる。以下二類に分ち、各項の下に説明の詞を原文で示し(特別断りのものは帯本)各の例句一句宛舉げて解説に代へる。違付の類に、「おさへたる」を入れたのははの説明に「ちかへて付るをおさへたるはと云也」とあるに准じたものであり、「並さるも」を入れたのは、「並たるも」を平付に入れた(平付のその説明に「ならふ」とあるに依る)のに對立させたのと、例句の實際とからである。「うたがひたる」を入れたのは、「うたかひ付」が平付に對立するものであるのと、例句の實際とからである。(例句の上は前句、下は付句である。)

(a) 平付の類

こそ 「同心のこそは平付に付」「おなし心のこそ也平付のこそ共云也」

やる方もなきこゝちこそすれ しのふへき文には人のなをかゝて 順

そ 「ならふるは平付也」

ときひろけてそ薪をほす 山さむき柴の戸ほそに日を入れて 侍

は (本)「ならへて付る平付のてには也」

旅ねの月はさたかにもなし 松をふくあらしの陰の草まくら 侍公

も 「並たるも」

舟の中にも春や來ぬらん わつかなる石に植木の花さきて 良

だに (本)「物を二ならへて取くみたるてには」

我こよろたにかくれ家そなき

狩人の入野の雉子音を鳴て

良

いづく「平付」

いづくも旅のかりねなりけり

宿ことにむすふあやめの草枕

頓

(b) 違付の類

こそ 「問答のこそにはちかへ付に付る也」

くたすいかたのかすとこそなれ

破たる真木の板はし末落て

侍

そ 「おさへたるには違付」

たてる一木の梅そかはれる

老か身の心の花は友ならて

砌

は 「おさへたるは也」「ちかへて付るをおさへたるはと云也」

人はをとせぬあしの屋の中

われそすむうき世を誰か捨つらん

砌

も 「並さるも」

秋も今はなるそかなしき

萩にふく風はむかしの夕にて

良

ば 「みなおさへたる手仁葉也」

山あれはこそ月は入らめ

雲霧の八重のしほ路のわたの原

良

か 「うたかひたる手仁葉」

いく重かつもる朝あけの雪

浪かゝる浦のはまゆふ下おれて

順

連歌秘傳抄の付合説

と× 「おさへたる手仁葉也」

故郷に歸ると見づる夢覺て

まくらの上に鶴のなく聲 頓

いづく「うたかひ付」

舟路の跡の山はいづくそ

松原の昨日は見えし朝かすみ 良

以上×印のあるものは夫々一用法のみで、他は一つで二用法のあるものである。以上の分類に入らないにはの中、猶・又・ねかひてには(はやかな)なれもには、付合の作用上の説明がない。但しなれもは並べたるもに入る性質のものである。次に下知のてには(なかりそへ)「なおもひそへ」は、「に付る」群の筆頭に在つて「と留りて付る」群に接してゐるが説明には「て留り覽留りにては付かだし但上手の手立にては付る事あり」とあつて、恰も兩群を連繫する役割を持つてゐる。が付合の作用上の説明はない。(發下知の項の例句中、辭本に終りの三句だけ、付句に下知のてはが入つてゐる。「に付る群として異」であるが、太本伊本では三句全て省略されてゐる。帶本を始源と見、太本伊本を後本と見る一説か。)次いで、ころであるが、茲の例句は全て前句が短句、付句が長句で、短句の末尾にころとあるものである。勿論「と留りて付る」群に入るべきでなく、「に付る」群であるが、特異の例で、然も其の作用の説明は、「比と云手仁葉大事也いひかけては付ぬ手仁は也云はなちて付るに能付也」とあつて、「と留りて付る」群に用ゐられたと同じ説明が加へられてゐる。以上所謂てには付の内容の概略を擧げた。茲で以上を要約し、若干補説して置き度い。本書に擧げたてには付は大體「と留りて付る」と「に付る」との二群に分れる。前者が付合の様態を規制する仕方は、「いひかけ」と「いひはなち」が中心になつてゐる。又後者のそれは平付と違付が中心である。此の四つを比較して、その相違を言へば、「いひかけ」「いひはなち」は共に、付句である上句が前件となつて、前句である下句の後件に接続する場合で、「いひかけ」

は、てにはに依つて緊密に接続され、「いひはなち」は所謂てにはに依つて一旦中止され而して接続されてゐる。平付と違付とは前句の意思と付句の意思との間の關係で、それが平行の關係である時は平付で、對立の關係である時は違付である。従つて「いひかけ」「いひはなち」の關係と、平付・違付の關係との相互に啮合ふ場合もあり得るのである。例を以て言へば、前に擧げた平付のそは

ときひろけてそ薪をはほす　山さむき柴の戸ほそに日を入れて　侍

で、そが強調する「ひろけ」の意思に平行させて「戸ほそに日を入」れるとした所が平付で、留所から言へば、てに依つて前句に「いひかけ」てゐるのである。

倭而、上句の留所のてにはの「いひかけ」「いひはなち」の機能、又前句中のてにはの平付・違付の機能は、上述の如く極めて少數のてにはに就いて觀察された結果で、一般的に適用されるかは疑問である。又それ等の機能が、純粹にてにはそのものの本具する職能にのみ依存するか否かになれば更に檢討を要する問題である。併し宗祇が右に於て取上げたてにはは大體古來問題になつてゐるもので、それ等を捉へて觀察を深めてゐる點は見遁せない。又平付・違付をてにはの考察に導入することに依つて、一方ではてにはの機能を明確にすると共に、一方では平付・違付の内容を深化してゐる。八躰に言ふ違付の説明と、てには付に言ふ違付の意味する所を比較すれば、思半ばに過ぎるものがあると思ふ。

四　結　び

上來述べて来た所で明かな様に、八舛の論は本書として分量も少く。又その先蹤に比較して特に秀れた所も見られないが、てには付の論は量質共に注目すべきものである。そこで最後に本書以前の前には付の史的発展を一瞥し、本書の價値に觸れたいと思ふ。

先づ良基であるが、彼のてには論は句の留所の前にはを中心としてゐる。連理秘抄では、に・ては上句の留りによく

下句に悪しとし、僻連秘抄では、上句の物名留りはよくなく、下句の前には留りもよくないとしてゐる。擊蒙抄(鹿島氏紹

介聞口評註本)韻字の條は専ら留所の前にはを注意して、よ・つ・は・かな・せん・そ・も(註中に名目を明示せざるのみを稱ぐ)が付句の留

所にある例句を擧げてゐるが、其の作用には説及んでゐない。知連抄(東北帝大本・京大蔵本・聖道集上卷)の三儀五舛の中、三儀の第一

にをの六の次第には、哥てには・心てには・請取てには・かけてには・すててには・咎てには(東北大本「密てには」とあるが、聖道集、咎がよい)

の外に重てにはがあるが、以上は大體上句(前句でも)の句末の語の縁語・同音・本歌の詞等が下句(前句でも)の語頭に來

て接続する特殊な場合で、唯心てには、咎てにはの二つが稍趣を異にして、付句の句末の語が前提し推量する所に、

前句成立の場所の與へられてゐるものである。以上が良基の前には論の概要で一二のものは留所の前にはに注目し、

その作用に名稱を與へたが、まだ充分でない。その一二の中に物をと留つて付る例があり、(一紙品定)之を「咎てには」

と呼んでゐるが、連歌秘傳抄違付の物をの先蹤と見られる。又右の請取てには(長短抄では)かけてにはは、秘傳抄にあ

つて説明を省略してゐたものゝ源頭である。(内容は小奥にして大同)

梵燈庵の長短抄は良基の説を中心にしてゐるが、知連抄の六の次第等も繼承して居り、その他に、チカイテニハ・

ワケテニハ・ソイテニハ・ワカレテニハ・アワセテニハ等を擧げてゐる。チカイテニハ以下は、既に留所から離れて

句中のてにはを問題にしてゐる。チカイテニハでは前句のコソ、ワケテニハでは付句の句中の區別のハ、アワセテニハでは並列のヤ等に依つて付合はされ、殊に後二者はハ・ヤを指摘説明してゐるので、良基の説から見れば數歩進展したものである。尤も右の部分が良基の説に基づくとすれば、良基自身の進歩と言つてもよいであらう。

宗砌に入つて、てには付は俄然進展してゐる。即ち初心求詠集添加部分・宗砌袖内・密傳抄等に見えるのがそれで右三書大體似た内容を有つてゐる。今項目だけを對照して擧げると次の通りである。(上の数字は各書に於ける順序を示してゐる)

初心求詠集添加部分

密傳抄

宗砌袖内

一、こそ付の事(こそにあたりて付)

一、こそを付る事

一、こそと云に付様あり

二、こそをもて付事

二、こそを引まはして付る事

二、こそを引かへして

三、そ付の事

三、そを付る事

三、そと云に付様

四、そにて付事

四、やにあたりて付

四、又引かへして

五、はにはをもて付事

五、はを付る事

五、とゝめにをもつて

六、はににをもて付事

六、はをひきちかへて付る事

七、物をにて付事

七、はをとかめて付る事

八、上下らんを付てちかふ事

八、やを心にかけて付る事

七、をに心をかけて付やう

九、もにもにて付事

十、なからにて付事

九、順のなからの事

十一、とかめなからにて付事 十、とかめなからの事

標目の一致しないものも、例句は同一である。要するに宗砌は、全ててにはを明示し、同じてにはの前句にある場合と付句にある場合を分け、「あたりて付」「とかめて付」「ひきちかへて付」の如く僅少ながら付合の作用を説明する等精細である。尤も右の中、物をは知連抄に、こそ・はは長短抄にと夫々先蹤が求められ、又なからの兩用は連歌十躰(神宮文庫「連歌初心抄」所収本の奥に「從一位藤原良基御判」とある)に見えてゐる等である。併しそれが、宗砌が、昔のてにはの抄を披見したと秘傳抄にては付の小序(場前)に記す所以と思ふ。右の中なから以外は全體秘傳抄に取入れられてゐる。「上下らんを付てちかふ事」は秘傳にはらんと留りて付る項とらんに付る項と二項に分けて入れてゐる。こそ・そ・はは共にそれが前句中に在る場合のみを取入れてゐる。物を・も・と・め、等も大體取入れられてゐる。然して宗砌が用ゐた「にあたりて付」をひきちかへて付」「をとかめて付」等は句例から見て違付に相當し、宗祇がてには付に、平付と對して違付を導入する機縁と見られる。併し前節に眺めた宗祇のてには論と比較すれば、その間に飛躍的な進歩のあることに氣付くであらう。

附記。心敬の馬上集には若干てには論があるが、てには付としては殆ど問題にならぬ。宗祇の他の著作の中、長六文や石田元季氏本連歌賦物集所收の一書(署名なし。奥に文明十一年(利鏗)下句、宗祇作とあり)等との關聯、又連歌諸躰秘傳抄との比較、手爾葉大概抄之抄との關係等は、他日に譲る。

この拙い小稿に種々御注意を下さつた福井先生に深謝します。又貴重な資料の閲讀を快諾して下さつた伊地知哲夫兄太田武夫兄に感謝します。

又高野博士に秘傳抄の他の二本ある由を、江藤兄から教へられた。他日恩借の機を得て補ひたい。